考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信
ARUKA Newsletter

NO.226
2022.7.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器 ―山内清男生誕120周年に向けて―

鈴木 正博

● 第46回 ●「大森式」の再制定と山内清男

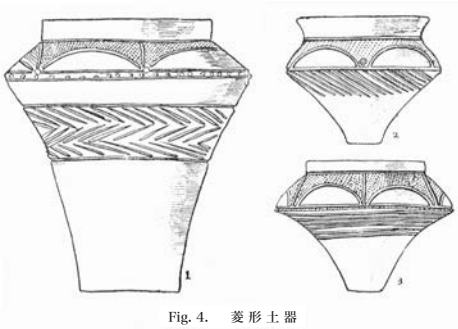
加曾利貝塚B地点の層位を標準とする**昭和3年制定の加曾利B式**は、既に触れた八幡一郎が発掘を担当したものの、層位資料の可視化提示も具体的な解説も未明で、山内清男以外には「**土器型式の内容決定**」に接近できない。この概念的な学術ジャーゴンに対して**昭和2年刊行の『日本原始工芸』**は、全国規模における土器等の網羅性に加え、標本性に優れた形態と装飾の全貌が窺える多数の完形土器を満載しており、参照の利便性が極めて高い点に優位性がある。

山内清男の加曾利B式は、その後の地点別層位別資料を加えて「細別」され、具体的な写真標本により可視化される**昭和14年の『日本先史土器図譜』第Ⅲ輯**（「加曾利B式**（古い部分）**」）**・第Ⅳ輯**（「加曾利B式**（中位の古さ）**」）の3「**細別**」刊行（第Ⅰ輯が弥生式の「十王台式」（後期）と「野沢式」（中期）に充てた背景は昭和13年『弥生式土器聚成図録』批判）までには2「**細別**」指示等、**加曾利B式「細別」には概念変遷史の展開**も見られ、**「細別」認識の要となる2「細別」に注目**する。

加曾利B式研究は日本考古学近代化の出発点から既に開始されており、他の領域に比して**目的に応じた遺物形態学の高度化による「データ対話型方法論」の適用**に優位性が観られる一方、常に原点に戻り方法の進展と共に**学史的資料の螺旋上昇すべき深耕**も忘れてはならない。**昭和4年**5月26日、**本山彦一**を発起人、**大山柏・小金井良精・杉山寿栄男**等8名を賛成人として**大森貝塚記念碑**建設起行式が挙行され、完成後の11月3日に除幕式と相成るが、その際に史前学会から『**大森貝塚建碑記念文集**』が刊行される。その中で杉山寿栄男は「大森貝塚の土器に就て」と題する一文を献呈し、「大森式」再制定について最新の視点で議論する（『大森貝塚建碑記念文集』は**昭和5年**の『史前学雑誌』にも再録される（杉山寿栄男（1929・1930再録）「大森貝塚の土器に就いて」『史前学雑誌』第2巻第1号））。

杉山寿栄男以前の「大森式」は学史的に2種の使い分けが知られる。第一の先行研究はE・S・モース時代に端を発し、人類学教室の時代にも年代区分として再評価される「薄手式」としての「大森式」である。第二は沼田頼輔による「大森式」突起の形態学である。本連載第28・29・30回で詳細に触れたが、大森貝塚の深鉢突起の殆どを網羅するが、杉山寿栄男の関心はそこではない。

杉山寿栄男の「原始文様」が選定した「**大森式**」の標本性は、「浅鉢」・「深鉢」（**突起への関心は希薄!**）・「臺付土器」・「釣手土器」・「注口土器」・「環状土器」の図版・解説に加えて、第49図の「菱形土器」（本連載の第13回で注目した「**ソロバン玉形**」深鉢）への注目が著しく、「**この種菱形式の壷形土器は大森貝塚土器を代表する形態**のもので、同一出土の破片に四個を認められ、その外有阪博士も大森出土のこの破片を蔵されて居る。**今関東地方に於てこの形式の完全なる出土品を見るに**、第四圖（第49図：引用者註）**1大森貝塚 2常陸稲敷郡陸平 3下総相馬郡立木**、其他博物館蔵品に常陸阿波村出土のものは1の大森のものと上下同一文様を施されてある、（原始文様集32）**この種菱形土器壷形土器は関東薄手式土器特有な器形**で恰も鉢形土器の上部に椀を被せた吸物椀状の如き複合形式に作られたものである。」（ゴチック体は引用者、以下同様）との「**コロボックル考古学**」による分布論的特性に基づく。その纏めは「この記念号を期して、吾々は以後**大森式を以て関東薄手式の基準名を附しておき度い**と希望するものである。」と奮うことになる。



▲第49図　杉山寿栄男の「大森式菱形土器」

このように山内清男の『人類学雑誌』加曾利B式と杉山寿栄男の『史前学雑誌』「大森式」の両者が略同時に共々自信に満ち溢れて披露された経緯は、加曾利B式研究にとっては大きな転機となる。何故ならば、層位の新古紹介のみで「**土器型式の内容**」の可視化解説を伴わない山内清男の加曾利B式は改めて説明責任が求められているからである。

その頃の山内清男は多忙を極め、**昭和5年**までは本連載第45回で触れた計画的な研究が続き、それをベースに**昭和7年**からは新たな研究段階へと進展した画期的な総括論文の連載（「**日本遠古之文化（1）～（7）**」）が始まる中、**昭和6年**には**縄紋原体啓示**（「偶然、昭和6年斜縄紋は縄を回転して押捺したものであることを発見した。」（1964）「縄紋式土器・総論」『日本原始美術Ⅰ』）も受け、原体解明が開始される。そして**昭和8年**に松本彦七郎の呪縛が解かれるや否や晴れて東北帝国大学を辞し、東京での自由な研究活動に従い、「**原始文化研究会**」（**昭和9年**から**昭和11年**12月まで）及び名称改め「**先史考古学会**」（**昭和12年**から**昭和13年**まで）を主宰する等新たな研究環境を構築し資料提供関係も求めつつ、『日本先史土器図譜』の標本選定が進行する。

縄紋原体啓示前の**昭和5年**、研究の根幹である「土器型式」編年の概要と加曾利B式の編年的位置については即座に組織的な研究成果を披露し、**杉山寿栄男の「関東薄手式土器」は「大森式」として一括すべき内容ではなく、既に層位的な年代区分として「堀之内式」「加曾利B式」「安行式」の順に編年される現状**（（1930）「斜行縄紋に関する二三の観察」『史前学雑誌』第2巻第2号）を再提示する。これを受ける形で八幡一郎も**昭和7年**『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告』第5編の姥山貝塚発掘報告書で「第4群（同上**堀之内式及加曾利B式**）」と紹介する。

やがて**山内清男も説明責任から「大森式」に触れる機会を得、加曾利B式と「大森式」の両者が混在する地方編年に至り、「大森式」の真髄を雄弁に語る編年**として貴重な学史となる。

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目　次

■加曾利B式土器　「大森式」の再制定と山内清男（第46回）　鈴木正博 …1
■考古学の履歴書　ことのはじまり（第39回）　間壁忠彦・間壁葭子 …2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第219回）　細川剛史 …3
■考古学者の書棚　「縄文海進 ―海と陸の変遷と人々の適応」　遠藤邦彦 …4

考古学の履歴書

ことのはじまり－「‥それでは　何だ」(第39回)

間壁 忠彦・間壁 葭子

8. 奈良三彩薬壷形土器の大と小(3)

先回は岡山県赤磐市にある熊山山頂の史跡、段状石積遺構跡出土の奈良三彩小壺に触れた。この遺跡に興味を抱く人なら奈良の東大寺に近接した**頭塔**や、**堺市の土塔**はご承知であろう。熊山遺跡の基本的な形態は頭塔に似たもの。

だが規模は、頭塔がはるかに大きい。頭塔は方30mの基壇に7mばかりの4段土塔が築かれ、各面に多くの石仏や瓦が配されていたとされる。熊山は先回図示したように、露岩加工を含めた11mばかりの基壇の上に、3段石積で築かれている。ただ異なるのは周辺山中に同規模の石組みをはじめ、小型のものも含めて30余基の同様な遺跡が存在。この遺跡群は一体誰か、何のために造ったのか、今も未確定。

熊山遺跡では先回図示の、奈良三彩小壺は出土状況から見て、佛舎利容器とも考えられよう。しかし同時代である同じ形態の奈良三彩大形壺には、仏でなく当時の人の火葬骨が入って埋葬されている。ここに当時の人の奈良三彩薬壷形の壺に対する、特異な意識と扱いがあったと思われる。

これら三彩小壺の実年代を示す事例は、先の項、吉備真備祖母骨蔵器の説明中、幾度か触れた神亀6(729)年2月9日銘墓誌を持つ、小治田安萬呂の墓である(以下の説明参考は、奈良文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』)。

この火葬墓の人骨は、木製容器に収められ、容器の上とか、側面から鋳造金銅版に刻字された墓誌だけでなく、「左琴」・「右書」と、年月日を刻字した、2枚の銅版小札が出土。

【この三か所にも書かれた日付の翌日は、長屋王家の悲劇が始まった日でもある。膨大な長屋王家木簡の中には、家政を扱う重要な舎人(従者)に、小治田御立という人物がいる。(寺崎保広『長屋王』吉川弘文館 参考)私見ながら不思議な日付や人脈の関係を思う】

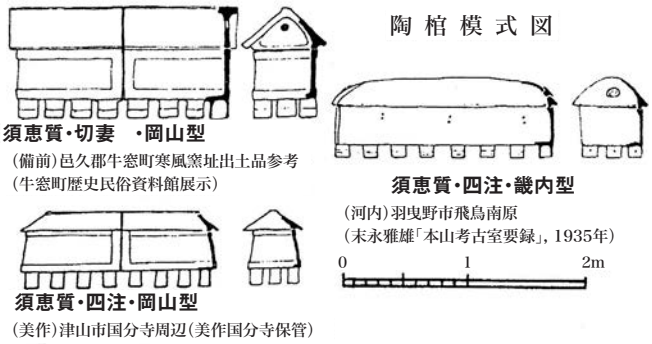
琴・書は当時の唐代における知識階級の教養を表示したもの。墓の周辺からは、和同銀銭10枚・奈良三彩小壺(底部破片)・鉄板片・土師質胴長丸底甕、須恵器の平瓶片など。

この小治田安萬呂については『続日本紀』に叙位記録だけが記されているのみだが、最初に記された景雲4(707)年(25才の若さで崩じた文武天皇最後の歳)彼は従6位下から飛んで従5位下まで昇進。何の褒章かはわからぬが、彼の墓に伴った極めて珍しい、和同銀銭や奈良三彩の製作などに関わったとも思われる時期。墓の遺物を見ると、彼は唐代文化へのあこがれが強く、渡航を強く望みながら果たせず、死後祭祀にその思いが、込められたとも見える副葬品の数々であった。

ところでこうした奈良三彩小壺の出土地は、海の祭祀のようにうに数多くの小壷を出土するのは稀で、1点のみという場合が多い。しかし、子壺の出土地は優に50ヶ所を越し点数は、100点にも迫るものだろう。本州の北から九州に及んでいるが、主には奈良時代からせいぜい平安初期まで。出土遺跡の性格は、国や地方の役所とか寺院跡で、何かの祭りの跡かとも思える遺跡が基本だが、海の祭り以外、性格が目立つ様相はない。例えば岡山県でも造山古墳にも近い津寺遺跡(『岡山県埋蔵文化財報告116』1997年)では二彩子壺1点や、近くには土師器に和同銭を入れた遺物が出土しているが、それぞれの性格は同時的か否かも難しい。

一方、大形の三彩薬壺形土器で完形品は今のところ、僅か6点、全て火葬骨壺と見てみて良いだろう。全点国重文。破片出土でも2～3か所に過ぎぬ。国重文6点の、一応注目すべき点だけ示しておこう。副葬品はなかったとみられる。

- **大阪府茨木市安威出土**　東京国立博物館蔵。明治末年、茨木市の大職冠山から石櫃入りで出土とされる。蓋の保存は良好だが、胴部の三彩釉はかなり荒れている。石櫃の蓋と身の合わせが悪く、隙間があったのか?　総高15.7㎝　胴徑21.0㎝
- **神奈川県川崎市登戸付近出土**　昭和初年出土で、火葬骨壺。あまりにも保存状態の良いため、近年の作かとも疑われたという。これも石櫃入りか?　総高16.5㎝
- **和歌山県橋本市高野口町名古曽(一里山)出土**　京都国立博物館蔵。昭和38(1963)年工事中発見。石櫃入り極めて保存状態は良い。火葬骨壺。近接して名古曾廃寺(白鳳期)がある。総高22.8㎝
- **伝奈良県生駒郡出土**　安政年間出土の箱書きあり。大阪市立東洋陶磁美術館蔵。蓋なし　高さ17.5㎝
- **出土地不詳**　九州国立博物館蔵。蓋なし　高さ13.7㎝
- **今回問題の、伝津山市出土品**　先に陶棺と共に出土を強調したのは、現在津山市の国分寺所有、吉備地方としては最も珍しい、須恵質四注家形陶棺との関係。説明は次回として、7世紀も後半に近い、近畿地方と岡山での須恵質陶棺形態の差のみを下図に示す。



間壁忠彦　略歴	
1932～2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954～1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973～2006年	同上館長
1968～1998年	広島大学、1968～1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982～2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006～2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葭子　略歴	
1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956～2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979～1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985～2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 219

稲村御所館跡 ～福島県須賀川市稲

細川 剛史

今回、私が紹介する遺跡は、福島県須賀川市に所在する稲村御所館跡（いなむらごしょたてあと）である。

須賀川市は、福島県中央部のやや南に位置している。盆地性の気候を活かした農業が盛んで、きゅうりやりんごをはじめとする数多くの農産物が生産されている。また、ウルトラマンの生みの親である円谷英二監督の出身地であることから、ウルトラマンの故郷M78星雲 光の国と姉妹都市提携を結んでおり、中心市街地にはウルトラヒーローや怪獣のモニュメントが立ち並んでいる。特撮ファンの方は是非足を運んでみてほしい。そんな須賀川市の中央部に位置するのが、室町時代の居館跡である稲村御所館跡である。

応永6年（1399）、鎌倉公方（鎌倉府長官）の足利満兼は、鎌倉府による奥羽州支配の拠点として弟の満貞を須賀川のこの地（旧称：陸奥国岩瀬郡稲村）へ派遣した。その居館が稲村御所である。この場所を拠点とした理由については、当時、南奥以北には伊達氏や大崎氏など反鎌倉府の国人たちがいたため、進出が難しかったことや、岩瀬郡が鎌倉府の政所執事を務めた二階堂氏の所領であったことなどが要因と考えられている。なお、稲村御所と同様に、現在の郡山市にあたる安積郡篠川（ささがわ）には、満貞の弟である満直が派遣され、篠川御所と呼ばれた。

稲村御所は、満貞が政務を執る場所でもあった。確認されている発給文書から、地行安堵、官途推挙、軍勢催促など、政治や軍事に関することを取り仕切っていたことが分かる。しかし、満貞の強硬な施政による不満があがり、国人による反乱がたびたび起こった。また、室町幕府と鎌倉府の対立が激しくなり、親鎌倉府の立場であった満貞は、幕府側の立場をとった満直や有力な国人たち押され、旗色が悪くなっていく。そして、応永31年（1424）、満貞は稲村から鎌倉へ引き上げることとなったのである。なお、満貞が鎌倉へ帰還した後も稲村には代官が置かれ、鎌倉府側は状況の打開を図っていたと推測されている。

さて、稲村御所館跡の地形は、丘陵上にある「御所館」部分と、その周辺部分にわけられる。総面積は約80,000㎡である。丘陵上は東西130～170m、南北140mの範囲で平場が存在し、現状でも、平場の周りにめぐっている土塁や、北側の空堀が確認できる。丘陵下にある御所館に伴う堀は、南側と東側の一部で存在が確認できたものの、それ以外の地点は未調査のため判然としていない。

▲写真1：稲村御所館跡

雑駁に遺跡を概観したが、私と稲村御所館跡の出会いは、私が須賀川市の臨時調査員として発掘調査に携わった平成25年に遡る。その年に大学を卒業した私は、地元東京を離れ、須賀川の地で調査経験を積むことを決めた。作業員経験はあったものの、調査員経験はなかったため、期待と、それをはるかに上回る不安を胸に抱き、引っ越し作業を行ったことを覚えている。私が調査に携わったのは、平成25年度の1次調査と、平成26年度の2次調査である。1次調査・2次調査ともに国道118号線バイパス改良工事に伴う発掘調査で、丘陵下南側の御所館の南堀と推定される地点の調査であった。（写真1：中央の丘陵が御所館部、左下部分が調査区）

調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が確認された。縄文時代の落とし穴や、奈良・平安時代の竪穴建物跡などが検出されているが、やはりこの遺跡で主体となるのは中世といえるだろう。堀跡、溝跡、掘立柱建物跡を中心とした遺構群と、かわらけや古瀬戸・常滑焼などの国産陶器、青磁などの輸入陶磁器、木製品が数多く出土したことにより、改めて本遺跡が中世の拠点的な館であったことが確認できた。

堀跡は、出土遺物や土壌サンプリングから、稲村御所館跡が造られた時期に相当し、年代としては、満貞が下向した応永6年を若干遡る時期から、鎌倉に帰還する応永31年頃と推定される。遺構からは、陶磁器やかわらけ、木製品などが出土しており、特に木製品の出土数は非常に多く、漆器椀や折敷などの飲食器・容器から、木簡などの呪術具と思われるもの、木材等も含め、1800点以上にも及んだ。また、紙製品の烏帽子も出土している（写真2）。漆を塗った和紙を折りたたみ、帽子としたものである。側面はほぼ欠損しており、本来の大きさを特定することはできないが、欠損部から中を観察すると、和紙が何重にも重ねられていることが分かった。本遺跡からの烏帽子の出土はこの1点のみで、全国的にも貴重な例といえるだろう。これらの出土地点は、堀跡の中でも最も標高の低い位置であり、長期間水分を含んでいたため、劣化を妨げていたものと考えられる。

これら以外にも、口を合わせた状態で2個体の墨書かわらけ（写真3：中央の2点）が出土するなど、興味深い成果があがっており、この調査成果は「発掘された日本列島2016」展にも展示されることとなった。

▲写真2：烏帽子

▲写真3：かわらけ

この稲村御所館跡の調査が、私の調査員としての第一歩となった。この地での様々な経験が、今の私にも大きく影響していると考え、今回マイ・フェイバレット・サイトとして、この遺跡を紹介させていただいた。本遺跡については、丘陵上御所館部の当時の様相など、まだ分かっていない部分も多い。今後、各分野での調査・研究が進むことで、この土地の地域理解に繋がっていくことを期待したい。

参考文献：

須賀川市教育委員会 2017『須賀川市文化財調査報告62：稲村御所館跡・徳玄遺跡』

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山本良太さんです。

考古学者の書棚

「縄文海進 ―海と陸の変遷と人々の適応」

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江 著／冨山房インターナショナル(2022) ―――― 遠藤 邦彦

縄文海進に関する標記の本をこのほど刊行した。関東地方の縄文海進については非常に古くから多くの研究者によって研究され、学校教育でも取り上げられてきたので、多くの方々になじみ深いものがあるはずだ。その海が埼玉県の最北部まで入っていたことは、もっぱらその周囲に貝塚が沢山あり、その貝塚から貝殻が大量に見つかったことが根拠であった。そのこと自体は大きな発見であり、評価することに躊躇はないのであるが、しかし貝塚の周囲は陸地であって、海の気配は全く認められない。本当に“奥東京湾”と呼ばれる海がその周りにあったのだという証拠を見つけたい、というのが学生時代の私の願いであった。それには遺跡の近くの低地でボーリングを行い、コア試料を得て、貝や有孔虫・珪藻などの分析をし、年代も測定し、さらには花粉分析を行い、多様な古環境を明らかにすることである。

東京の下町の地下にはその頃の海の地層が工事現場から発見され、貝殻を豊富に含むその地層に有楽町層の名称が与えられた。有楽町層は沖積層の上部をなすもので、11000年前以降の地層である。私は沖積層の研究を東京、神奈川、千葉、埼玉南部の低地で進めることになった。

その後、近年に至るまでに、奥東京湾域において、自然貝層、珪藻分析、化学分析などにより海の存在が確認され、年代が測定された地点は、各研究者によるものを含めて合計40か所を大きく超えることになった。その結果、貝塚だけに頼ることなくかつての海の広がり方を復元することが可能になった。海が陸地に浸入する海進が起こるのは、普通は海水準の上昇である。以上のような沢山のデータが集まると、この海水準上昇の過程が詳細に明らかになり、日本でも最も詳細な相対的海水準変動曲線が作成された。中でも海水準を正確に示すマガキ礁の活用が柱になっているのは重要である。

時が進んで、有名な蓮田市の黒浜貝塚を見学する機会があった。そこにはハイガイの貝殻だけが1つの住居跡の中にぎっしり詰まっていた(写真)。ハイガイは現在の関東地方には認められない亜熱帯種で、今の北限は紀伊半島あたりと考えられている。その一角にマガキだけが集中していた。さらに、貝層の下には犬の下顎骨があった。ではなぜ？という疑問がこの貝塚だけでも多く湧いてくる。貝塚と言っても貝を食べて殻を捨てた場所とは限らない。埋葬したのかもしれない。

▲黒浜貝塚群の炭釜屋敷貝塚4号住居跡のハイガイ貝層

以前からこの貝塚群からは“棒つきカキ”とよばれる、棒の痕が付いたカキの存在が知られていた。その状況を知れば知るほど、カキの養殖に近い事が行われていたのではないかと思えてくる。

横須賀などが位置する湾口部に目を転じると、湾口部一帯で最も有名な貝塚は夏島貝塚である。この貝塚は11000年前～10000年前のもので、そのころの海水準は現在より50mも低いので、現在の湾口部とは全く条件が異なる。夏島は現在は埋め立てによる陸地の中の45m位の高さの丘であるが、かつては島であり。貝塚の時代には95m位の高さがあったと考えられる。その島は干潟で陸とつながっていて、干潟にはマガキが生息していた。

湾口部の貝塚からは貝以外に、魚骨や釣針などの道具類、装飾品等が出土する。貝塚から出土する貝の種類は、6000年前頃からマガキなどから、小ぶりの巻貝に変わる。貝に目が行きがちであるが、魚類を含む海産資源全体の活用という観点から見直す必要があるようである。

縄文海進の海は、11000年前には湾口部の横須賀付近では-50mあたりにあり、その2000年後には現在の東京湾沿岸部の羽田や浦安付近にマガキ礁を形成し、3000年後には埼玉県南部三郷付近にマガキ礁を形成し、4000年後には奥東京湾の最も奥に達していたことになる。この間に海岸線は約100㎞も内陸へ移動したので、海進の速度は平均して100㎞/4000年、1年では25m、海水準(海面)高度は50m上昇、平均上昇速度は50m/4000年、1年では1.25㎝となる。1年単位で見ると大したことのない数字に見えるが、10年、100年で見れば、ばかにできない数字である。そうした大きな変化に縄文人はうまく適応してきたのである。

奥東京湾域に戻ると、それだけでなく、4500年以降は海水準がわずかながら低下するとともに、河川作用が活発化して、デルタの進出が勝るようになり、奥東京湾においては明確に海退が始まる。海であったところが河川の氾濫が繰り返される低地や低湿地に変わっていく。現東京湾の範囲でも海岸線の位置はあまり変わらないが低地は陸になり、小河川の影響が生じる。気候的にも最も温暖な環境から、時に寒冷な環境が卓越するようになる。

こうした環境の大きな変動の中で、縄文時代の人々は様々な工夫をしてきたことが読み取れる。必ずしも受け身ではなく、能動的に行動することを含めて、基本的には適応してきたと言えるのであろう。

アルカ通信　No.226

発行日　2022年7月1日
企　画　角張淳一(故人)
発　行　考古学研究所（株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15　TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp